# HCニューズレター

No.17

Human Care News Letter

2016年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会


# Resilience：回復へ向けてのヒューマン・ケア

## 第十七回学術大会を開催して


日本ヒューマン・ケア心理学会第十七回大会 大会委員長　遠藤 公久


第十七回大会をお引き受けし、学会シーズンの終わり頃ということもあり、困難な点も諸々ございましたが、九月二十六日、二十七日に無事開催することができました。実行委員一同、達成感と安堵の気持ちで一杯でございます。皆様のご協力、心より感謝申し上げます。

今大会のテーマは、「Resilience：回復へ向けてのヒューマン・ケア」にいたしました。人生で大きな危機や逆境に直面したときに、とくに大きな喪失を体験したとき、どのようにそれらの体験と向き合い、乗り越え、そしてその人らしさを回復していくことができるか、そしてどのようなヒューマン・ケアが必要なのか、皆様と一緒に考えたいと思ったからです。

学会初日は、スピリチュアルケアがご専門の窪寺俊之先生（聖学院大学）に「喪失とケア」をテーマに特別講演をいただきました。スピリチュアルケアというと、一見特定の宗教性と密接なイメージをもたれがちですが、窪寺先生は、特定の宗教性を超え、人間の実存に深く根ざすスピリチュアリティについて、とてもわかりやすくご講演いただきました。ケアの本質に関わる概念であると改めて痛感いたしました。

シンポジウムでは、「喪失とレジリエンス」というテーマを設定し、喪失を伴う様々なライフイベントのなかでも、（私が長年関わらせていただいている）がんの患者さんやご家族のレジリエンス（ここでは〝回復する力〟と定義）を高める心理社会的支援（ヒューマン・ケア）を取り上げ、患者（横田様と川上様：患者会）、看護職（大場良子先生：埼玉県立大学）、心理職（木村登紀子先生：いちかわ野の花心理臨床研究所）のそれぞれの立ち位置から（窪寺先生にも指定討論者になっていただき）光を当てていただきました。当然ながら何か結論に至るテーマではありませんが、レジリエンスとは単に元の状態へ戻る（回復）力だけでなく、個別性に即し、現在の病状を受容した上に生まれる、新たな可能性を見出す力でもあることがわかりました。会場からも、多くの質問や意見が寄せられ、深まった議論が展開できました。

二日目は、操華子先生（宮城大学）を講師にお迎えし、量的研究と質的研究の統合を目指したミックス法の研修会が開催されました。予定の定員をかなりオーバーする参加をいただき、関心の高さを知ることができました。心理学的には古くて新しい手法ですが、改めてこの手法を勉強してみると、研究者の力量が問われること、現象をより立体的に捉えるのにとても有用であることを再認識し、今後の発展が期待される手法であると思いました。

来年もほぼ同時期の開催が予定されています。老婆心ながら、会員の皆様におかれましては、論文の発表のご協力（ご準備）を賜りますようどうぞよろしくお願いいたします。



大会委員長　遠藤公久先生



日本赤十字看護大学


懇親会の風景：患者会による合唱

大会講演（公開講座）

## 「喪失とケア」

講演者　聖学院大学教授　**窪寺　俊之先生**

特別講演は、臨床死生学分野でご高名の窪寺俊之聖学院大学教授をお招きし、ご講演をいただきました。出席者は、約八十名でした。今大会での窪寺先生のお話は、前回の第十六回学術集会香川大会において、ウォルデマール・キッペス師によるスピリチュアル・ケアに関連するテーマとして、位置づけることができます。創立以来、当学会は、専門職が提供するケアの質の向上に寄与する学術活動を展開してきました。窪寺氏は、喪失とスピリチュアルケアは、手に負えない、難しいテーマであると述べています。しかしまた、ケアにかかわる専門職は、この問題を避けて通ることはできません。

窪寺氏は、専門職に求められるものについて、次のように述べます。専門職は、疾患の理解などの専門的知識と技術、人に出会うという人間性をもって慰め、喜び、希望を共有することが求められています。現代社会における人間の存在は、結果主義や多忙さ、人間関係の希薄さの中で、精神的価値が軽視され、自立や自律が強調されて、自己集中化を招き自我の未熟化が進んでいます。これを解決する課題は、スピリチュアリティーにあります。スピリチュアリティーは、目に見えないが存在する神秘であり、根源的、実存的なものです。人間の存在は、「私と私」「私と人」「私と神」の関係がありますが、危機に陥ったとき、人間をして何とかしようとするとき、人と人の横の関係から、縦の関係、つまり「私と神」の関係に目を向けることがあります。キリスト教では、自分を超えて神をみる、仏教では自分の中に仏をみる、という状態です。この状態になることで、生きられる、救いを得るという思いにいたります。専門職が行う心のケアの対象は、人との横の関係にある心理学的な問題、宗教的な問題、人生の意味や目的を問うスピリチュアルな問題があります。スピリチュアルな問題に共感することは、スピリチュアルケアの重要な要素です。そのために傾聴、つまりことば、表情をきき、感情、情動をきき、祈り、寄り添って奇跡を期待することもあります。自己存在を負えない人に向き合って、専門職自身が人生を生きることが一層重要なことです。……今回の講演を通して、日本におけるスピリチュアルケアの必要性を一層感じとることができました。

（香川大学医学部　清水裕子）



大会講演　窪寺俊之先生

シンポジウム

## 「喪失とレジリエンス」

大会初日の終盤、「喪失とレジリエンス」というテーマでシンポジウムが開始されました。今回は、〝がん〟という体験に焦点をあて、患者の立場、看護職の立場、心理職の立場からお話いただきました。

まず、患者の立場から横田様と川上様より、ご自身の闘病生活を通して感じてこられたこと、回復への支えとなったことについてお話いただきました。横田様からは、がんを知った当初の好き勝手にしてきた天罰が下った思い、しかたないと思いながらもうだめだという思いと孤立感から、情報を集め、今できるよいことをいいとこどりして養生しようという気持ちの変化があり、がんサポートコミュニティへの加入が支えとなったことをお話いただきました。川上様からは、ショックとともに現状をうけとめようとすることで精一杯であった状況から、家族がともにいてくれること、周囲の人のありがたさを感じ、少しずつ自分の気持ちに向き合い素直になれたことをお話いただきました。雨の中で心の中の太陽に気づけたという表現が印象的でした。



シンポジウムの様子

婦人科がんサポートグループに関わっている看護職の立場から、大場良子先生は、婦人科がんに伴う身体面および心理面での悩みや葛藤、女性性への影響から、サポートグループの活動と役割、支援の在り方についてお話いただきました。婦人科がんでは、治療に伴う身体面での苦痛や生殖機能障害などによって、女性としてのアイデンティティの喪失やゆらぎなど特有の心理的な危機を生じることがあるため、サポートグループの活動によって、平等な関係性の中でつらいのは自分だけではないことを知り、役割を見出し、現実的に対処できる可能性があり、体験者とともにいて安心して話せる場や正しく適切な情報を提供するような支援が重要であることをお話いただきました。

最後に、心理職の立場からは木村登紀子先生より、喪失という体験を個人がどのようにとらえるかによってケアのあり方も様々であること、人は人とのつながりの中で生きているので、他者に委ねるというあり方もレジリエンスには重要なのではないかというお話をいただきました。その人がその人らしくあるよう回復するためには、ケアする側の押し付けではなく、その人自身が気づき、その人が考えられるようになることが重要であることを改めて考える機会をいただきました。

（東邦大学看護学部　藤野秀美）

研修会報告

## 「ミックス法（混合研究法）の研究デザイン」

講師　宮城大学大学院　**操　華子先生**

二〇十五年度の研修会は、九月二十七日に日本赤十字看護大学（東京都港区）にて、宮城大学大学院教授の操華子先生をご講師にお迎えし、「ミックス法（混合研究法）の研究デザイン」をテーマに開催されました。会場には多くの参加者がみられ、ミックス法への関心の高さが窺われました。

最初に、操先生からミックス研究法（混合研究法）の呼称についてのお話がありました。呼称としては、マルチメソッド、混合研究法、ミックス法などの呼称があり、二〇十五年九月に第一回日本混合研究法学会が開催されたため、今後は「混合研究法」という名称でよばれることが多くなるのでは、との説明がありました。つづけて、研究法の歴史的発展経緯について説明をいただきました。ミックス法研究法は、量的研究と質的研究を用いて行います。哲学的パラダイムが異なる二つの研究手法を使用するミックス法が哲学的基盤にプラグマティズムをおくことになった経緯が、量的研究と質的研究の比較のなかで説明されました。操先生のご説明は、常に具体的な例を挙げながら進められました。そのため、とてもわかりやすく、ミックス研究法の世界にぐいぐいと引き寄せられていきました。

次に、ミックス研究法の具体的な手順についてお話しいただきました。ミックス研究法においてリサーチ・クエスチョンとデザインを発展させるためには、ストーリーを活用することが必要とのことでした。ミックス法には、「質的リサーチ・クエスチョン」、「量的リサーチクエスチョンあるいは仮説」が含まれ、その両方を探求していくデザインとのご説明がありました。また、研究デザ

インは、「順次的デザイン」、「収斂的デザイン」、「より高度なデザイン」の三つに大きく分けられ、順次的デザインには、〝量的研究により高い重要性がおかれた説明的デザイン〟と〝質的研究により重要性がおかれた探求的デザイン〟があり、より高度なデザインとして、〝介入デザイン〟、〝事例研究デザイン〟、〝参加型デザイン〟の三つのデザインが紹介されました。それぞれのデザインが実際の研究例で説明され、より理解が深まりました。

ご講義後、参加者から、「これまでも、尺度開発の研究ではインタビューによって口ウデータを出し量的に尺度を作成するという手法をとってきました。これまでの方法とミックス研究法の手法は異なるのですか?」との質問がありました。操先生からは「ミックス研究法の研究手法自体は新しいものではなく、これまでの研究でもミックス研究法に該当するものが多くなされていた実績があります。ミックス研究法として紹介することで、研究法の選択肢が広がると思います。」といった主旨のご回答がありました。

操先生のご講義はもとより参加者からのご質問から、ミックス研究法を深く知ることのできた研修会でした。操先生は常に身近な例で語られるため、私を始め参加者のみなさんは、自分自身のご研究を頭に浮かべられながら、ワクワクしながら研修をお受けになられたと思います。小春日和の爽やかな空のもと、充実した時間に浸りながら帰途に着くことができました。

(聖路加国際大学 佐居由美)



研修会の様子

最優秀発表賞　口頭発表部門

## 「第十七回優秀発表賞を受賞して」

東京成徳大学大学院 修士課程2年　栗原 里美

このたびは日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第十七回大会において、優秀発表賞という栄誉ある賞を授与して頂き、大変光栄に存じます。審査をはじめとして、学術集会を企画・運営してくださいました大会運営関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回の研究テーマは、「慢性疼痛患者における家族から情緒的サポートと痛みに対する意味づけとの関連」でした。腰痛、肩こり、関節痛といった慢性痛に悩む人は全国に約二、七〇〇万人いると推計されており、およそ七人に一人が慢性疼痛に悩んでいるといわれています。近年、慢性疼痛は、身体的要因のみならず、痛みへの過度な恐れや不安といった心理的要因や、周囲の人との人間関係といった社会的要因が相互に影響しあい痛みが増幅するとされており、特に、家族からの情緒的な安定の欲求を満たすサポートが重要であると指摘されています。本研究では、整形外科を受診した慢性疼痛患者二十名を対象に、家族からの情緒的サポートの程度による、痛みに対する捉え方や意味づけ方の特徴について検証しました。その結果、慢性疼痛に悩む患者は、家族からの共感や理解といった情緒的な支えを知覚していると、痛みの経験をした自分と他者につながりを感じるといった肯定的な感情を持ち、家族からの情緒的サポートを知覚していないと、痛みの経験をした自分に他者への否定的な感情を持つことがわかりました。このことから、慢性疼痛に悩む患者にとって、家族からの共感や理解などの支えは、自分の痛みに対してより意味を見出しやすいことがわかりました。今後は、慢性疼痛患者の心理社会的側面に対するケアを含めた心理的介入プログラムの作成に取り組んでいきたいと考えています。

最後に、平素より厚くご指導いただいている石村郁夫先生、お世話になっている先生方、共に研究に励む研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。

最優秀発表賞　ポスター発表部門

## 「第十七回優秀発表賞を受賞して」

川崎医療短期大学　森本 寛訓

この度は優秀発表賞を受賞することができ、大変光栄に感じております。審査していただいた先生方、ならびに連名発表者である桜美林大学長田久雄先生には、心より感謝申し上げます。

私は看護師を含む対人援助職者のメンタルヘルス保持について、特に、対人援助の現場で体験されるポジティブ、ネガティブ感情と関連した職業生活上の出来事(以下「PWLE・NWLE」とする)に着目して、研究を続けて参りました。昨年からは科研費の助成のもと、PWLE・NWLEに対する社会的共有行動に焦点を当て、研究しております。なお、社会的共有行動とは、PWLE・NWLEのような感情体験を周囲の人々と共有する行動のことで、それらの感情体験に付帯するポジティブ感情は増幅し、ネガティブ感情は緩和するとされます。

対人援助職者は常に同僚と協働して職務を行います。協働の過程では様々な情報をやり取りし、共有しますが、その情報にはPWLE・NWLEに関するエピソードも含まれると考えられます。ならば、対人援助職者は協働の過程でPWLE・NWLEに対する社会的共有行動も行っており、その行動次第では、ポジティブ、ネガティブ感情を増幅、緩和して、メンタルヘルスは保持されることが期待できます。

今回の発表を行うにあたり、まずは対人援助職者の社会的共有行動について自由記述式調査を行い、テキストデータを整理して項目化しました。さらにこれらの項目とうつ尺度を用いて調査を実施し、得られたデータを相関分析しました。その結果、社会的共有行動の体験頻度が高いと、特にポジティブ感情の体験頻度が高くなり、うつの体験頻度は低くなる傾向が認められました。今後は、今回の発表内容を精査して調査を重ね、対人援助職者のメンタルヘルス保持に貢献しうる社会的共有行動を明らかにしていく予定です。そして、最終的には、そのような社会的共有行動が行える対人援助場面での協働上の工夫を提案したいと考えます。

## 「学術集会第十七回大会に参加して」

いちかわ野の花心理臨床研究所　土田 直子

「豊かな想い」を感じた二日間でした。事情があり研究の場から離れていた私にとっては、久しぶりの学会参加でした。テーマは「レジリエンス」。今の私に、なんとぴったりしたテーマでしょう。

大会では、多くの出会いがあり、気づきがありました。シンポジウムでの患者の方のお話、ポスター発表の会場での異なった職種の方の間で交わされる熱心な質疑、ミックス法の研修会…立場や専門という垣根を越えてひとつの場にいる時、生まれるものがあるということを改めて感じました。いろいろな人が、同じ場で語りあうということの大切さに心が動きました。懇親会で披露された患者会の皆さんによる合唱団の、すばらしい歌声も耳に残っています。

窪寺俊之先生の「喪失とスピリチュアルケア」の講演をうかがって、スピリチュアルケアに対する見方が少し変わりました。「信仰のない人にも、その人の神がいる」「私を越えたものと私がつながっている」「感性の面からのアプローチ」。先生の温かいお人柄と相まって、安心感にも似た想いを抱きました。これこそスピリチュアルケアなのではと思いました。

今大会では、視点の異なるものが取り上げられ、それが大きく包み込まれたような印象があります。会場を後にするとき、ゆったりとした心地よい感覚を持ちました。人が人に出会い、関わることから生み出される「豊かさ」こそが「レジリエンス」につながるのではないかと考えています。

# 日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会
# 第18回大会のお知らせ

（埼玉県立大学保健医療福祉科学学会第７回学術集会と共同開催）

## 〈ヒューマンケアを支える専門職者のキャリア開発〉

日程：２０１６年９月24日（土）・25日（日）

会場：埼玉県立大学（〒３４３－８５４０ 埼玉県越谷市三野宮８２０番地）

**大会テーマ：「ヒューマンケアを支える専門職者のキャリア開発」**

・基調講演

「アイデンティティ論からみたプロフェッションの生成と深化
－「人」と「専門性」をどう育てるか－」

講師　岡本 祐子 氏（広島大学大学院教育学研究科 心理学講座 教授
教育学研究科附属心理臨床教育研究センター長）

（基調講演は一般公開となります。定員２００名）

・共同シンポジウム

「多職種連携の醍醐味と地域包括ケアへの展望」

・研修会

「ヒューマンケアにおける実証研究を支える調査法Ａ to Ｎ」

講師　小塩 真司 氏（早稲田大学 文学学術院 教授）

（原則として事前申し込みですが、空きがあれば当日参加も受け付けます。
会員には修了証を発行します。）

今後のスケジュール

1. 演題申込・発表論文集原稿提出　２０１６年４月１日（金）～ ６月17日（金）
2. 事前参加申込　２０１６年４月１日（金）～ ７月29日（金）
3. 研修会申込　２０１６年４月１日（金）～ ７月29日（金）

■抄録は大会の当日、受付でお渡しいたします。

**大会ＨＰ：http://human18.jp/**

**運営事務局：日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第18回大会運営事務局**
**株式会社 ドーモ　担当：水垣、井出**
**E-mail：info@human18.jp**
**※お問い合わせは、上記大会専用メールにてお願いします。**

第18回 大会準備委員会委員長：鈴木玲子（埼玉県立大学）

## 「ヒューマン・ケア研究」投稿論文募集

学会誌「ヒューマン・ケア研究」は年２回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。ご投稿・ご照会は左記学会誌編集事務局までお願いいたします。

（編集担当　安保英勇）

**●学会誌編集事務局**
〒９８０－８５７６ 宮城県仙台市青葉区川内27の１
東北大学大学院教育学研究科　安保英勇研究室気付
E-mail：jhcs@m.tohoku.ac.jp
電話・ＦＡＸ：０２２（７９５）６１４９

## Web担当からのお知らせ

学会のＷｅｂサイトは、下記の通りです。
http://www.j-hc.jp
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている原著論文（２０００-２０１４ No.2）のＰＤＦが学会Ｗｅｂサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には以下のＩＤとパスワードを入力する必要があります。また、このパスワードは、会員以外にはお知らせにならないようお願いします。
ＩＤ：ＨＣkaiin2016　パスワード：CyBzHu11
このＩＤ及びパスワードは、２０１６年４月１日より有効となります。
それまでは前年度のＩＤ及びパスワードをお使い下さい。

（Ｗｅｂ担当　岩崎祥一）

## 編集後記

学術集会の記事には、第十七回大会委員長の遠藤公久先生をはじめ、執筆の方々からの熱い想いが込められていて、参加できなかった会員の皆さまにも、充実感が溢れた大会の様子をお伝えできたのではないか思います。

このページの上方には、埼玉県立大学の鈴木玲子先生のもとで開催される第十八回大会のお知らせがあります。第一号通信も同時にお届けしますが、以降の情報は逐次ｗｅｂホームページ上に掲載されますので、ご覧の上、奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

（広報担当　木村登紀子）

**学会事務局の連絡先は次のとおりです。**

**●学会事務局**
〒１５０－００１２ 東京都渋谷区広尾４の１の３
日本赤十字看護大学　遠藤公久研究室気付
E-mail：humancarepsy@redcross.ac.jp
電話・ＦＡＸ：０３（３４０９）０９１４